

"Rambo: Reform with Anger"  
and other stories

written by Hironichi Maeno

# ラッポ〜怒りの改新

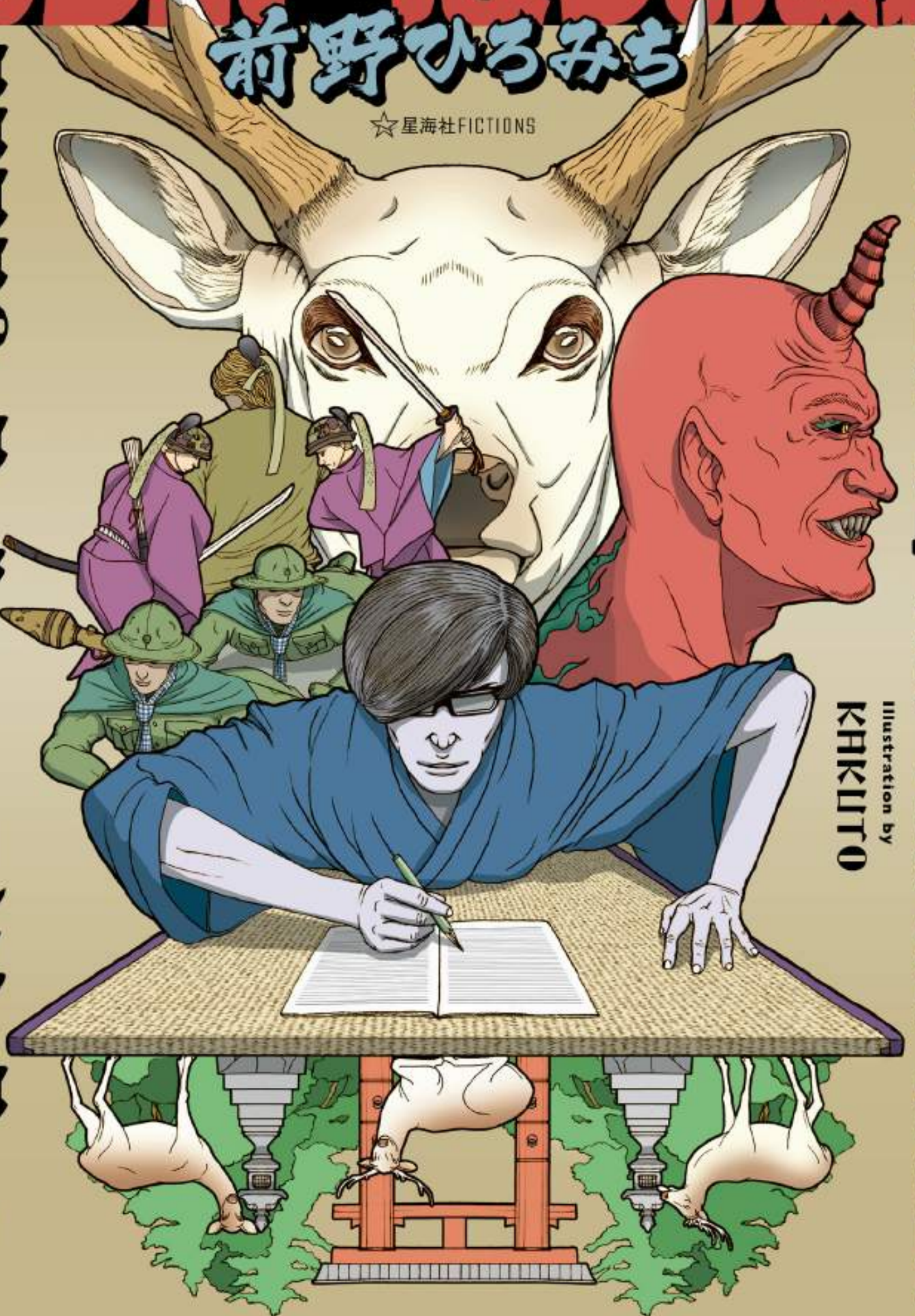
## 前野ひろみち

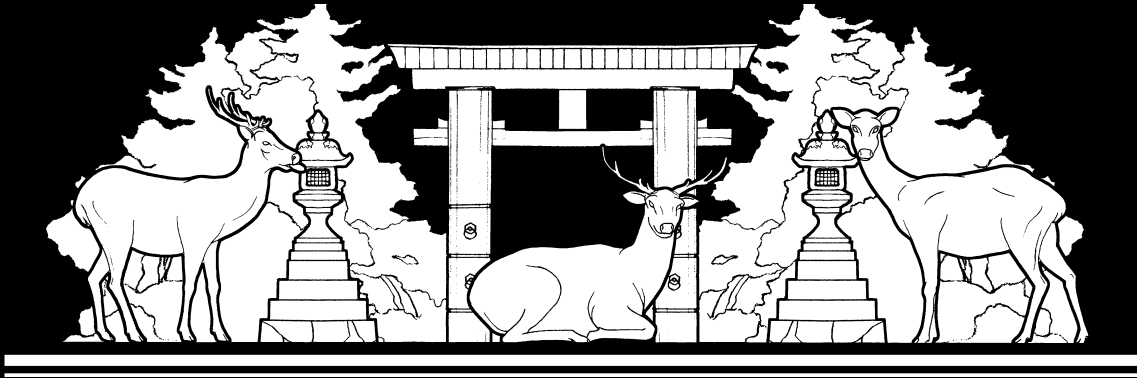
☆星海社FICTIONS

RAMBO: Reform with Anger

written by Hironichi Maeno

Illustration by  
KHKUITO





## ランボー怒りの改新



ある夏、ひとりの青年が斑鳩いかるがの里にフラリと現れた。

たくましい身体と日焼けした肌、髪は長く伸ばしている。彼の名はランボー。遠い異国ベトナムの奥地からやっとの思いで故国の島国へ帰りつき、難波津なにわづから飛鳥あすかを目指して歩いてきたのだ。

ランボーは今、一つの焼け跡を前にして呆然と立ちつくしていた。そこにはかつて山背やましろのおおえのおう大兄王らの住む斑鳩宮が建っていたはずだが今は見る影もなく、焦げた材木が夏草に埋もれているばかりである。

その変貌ぶりにランボーが戸惑っていると、供を連れて焼け跡を見てまわっていたらしい貴族の男が声をかけてきた。年の頃は三十代前半、柔和な笑みを浮かべた男である。

「やあ、まったく蒸し暑いですな」

そこで彼らは二言三言言葉を交わした。

ランボーがベトナム帰還兵であることを知ると、その貴族は急に礼儀正しくなった。

「無事のお帰りなによりです。なにしろたいへんな戦争だそうですね」  
推古天皇の御代、トンキン湾事件をきっかけにして蘇我馬子が火蓋を切ったベトナム戦争は泥沼化し、馬子が世を去ってその息子蝦夷の代になっても終息の兆しを見せていなかった。

前年に南ベトナム解放民族戦線いわゆるベトコンが全土で奇襲攻撃に出たテト攻勢によって、飛鳥の朝廷は激しく動揺し、ときの大王は蘇我蝦夷に空爆の一時停止と北ベトナムとの和平交渉を命じた。しかし事態は思わぬ展開を見せた。蘇我蝦夷の息子入鹿が独断で北ベトナムへの空爆を再開し、和平交渉を頓挫させてしまったのである。親子三代にわたって着々と政治の実権を掌握してきた蘇我氏は、大王の権威をすら意に介さず、ベトナム戦争を継続する意志を見せていた。

蘇我氏め、とランボーは思った。やつらはぬくぬくと飛鳥の里に暮らし、大勢の兵士を異国のジャングルの奥へ追いやっている。そんなに戦争がしたいなら自分で出かけていくべきなんだ。ジャングルと泥の中を這いずりまわって、好きなだけベトナムとやりあうがいい。俺はもう御免だ。

「くだらない戦争だ」とランボーは呟いた。

「めったなこととは言わないほうがいいですよ」

若い貴族はそう言って声をひそめた。

「ここには斑鳩宮がありました。山背大兄王も二年前に亡くなりました」

ランボーは驚きのあまり茫然とした。上宮王家がベトナム戦争に反対し、つねづね蘇我氏と対立していたことは知っていたが、まさか蘇我氏に殺されるとは思わなかった。ランボーは以前から山背大兄王に敬意を抱いていた。この愚かな戦争を止めることができないのは山背大兄王だけだと思っていたのである。

若い貴族はランボーが戦地へ行っていった間の出来事を語った。

二年前、山背大兄王を委員長とする「朝廷のベトナム政策に関する王族委員会」が設置され、山背大兄王は泥沼化するベトナムからの撤退を過激に主張した。彼は徹底した非暴力主義者であった。反戦運動は飛鳥を席卷し、「大王の位を狙った人気取りだ」と蘇我一族は陰口を叩いた。実際、山背大兄王は王位継承者として、蘇我氏と手を結んだ古人ふるひとの。大兄皇子と対立する立場にあった。「自分は天下をむさぼる気はない」と山背大兄王は主張したが、蘇我入鹿は聞く耳を持たず、將軍巨勢こせ徳陀とくだらに命じて斑鳩宮を攻めさせた。山背大兄王はいったん生駒山へ逃れたものの、常日頃から主張していた非暴力主義、ラブ&ピースの理想を捨ててまで入鹿と争うのを潔しとせず、ついにこの斑鳩宮に戻って子弟うからみ妃妾めもろともに自決したのであった。

「まことにいたましい事件で」とその若い貴族は語った。「蘇我氏の栄華の翳る日が来るとは思えませんな。跡継ぎの蘇我入鹿殿は立派な人物ですからね。彼らに刃向かう者なんていませんよ。あなたも命が惜しいなら、おとなしくしていることです」

ランボーは貴族に礼を言い、飛鳥を目指して歩いていった。

うるうると膨れあがるかのような真夏の奈良の山々の向こうには、何か不吉な予兆のごとく、異様に大きな入道雲がそびえていた。

その貴族は微笑んでランボーを見送っていたが、やがて側近を呼び寄せ、あのベトナム帰還兵を尾行しろと言った。「私はこれから南淵みなみぶちのしょうあん請安先生のお宅へ参る。何かあればそちらに知らせよ」と命じるその目は、打って変わって鋭い光を放っていた。

この若い貴族こそ、蘇我氏打倒を目論む中臣なかとみのむらじかまたり連鎌足、後の藤原ふじわらの鎌足である。

○

ランボーは飛鳥川を辿って歩いていった。

裸一貫で郷里を出て、將軍巨勢徳陀の率いる海兵隊に入隊したのち、ランボーはこの飛鳥の地で厳しい訓練をうけた。それは想像を絶する訓練だった。反吐へどを吐くまで走らされ、五重塔から突き落とされ、何の武器もなくイノシシを素手で屠ほふらねばなら

なかった。爆薬や武器の扱い、偵察技術も叩きこまれた。しかし海兵隊の訓練がどれだけ厳しいものであるろうとも、戦地よりはマシであった。少なくとも飛鳥にベトコンはいなかったからである。

やがて飛鳥川の対岸に甘櫨あまかしのおか丘が見えてきた。それは緑の巨大な獣が這うような姿をしていて、丘の上には蘇我蝦夷と入鹿が前年ようやく完成させた要塞が聳そびえていた。飛鳥を一望のもとに見下すその壮麗な要塞こそ、蘇我一族の栄華の象徴とも言える。

川岸に立って甘櫨丘を見上げていると、背後から声をかけられた。

「こんなところで何をしている」

ランボーが振り向くと武装した兵たちが立っていた。蘇我氏の配下である漢直あやのあたが率いる兵たちだった。山背大兄王の死後、中大兄皇子と蘇我入鹿の対立は激化しており、蘇我氏の警備を担当する漢直らは甘櫨丘に近づく不審人物を片端から捕らえていたのである。

「怪しいやつめ。どこから来た？」と漢直は居丈高に言った。

ランボーは貧弱な兵たちを見て舌打ちした。喋る気にもなれなかった。飛鳥川のほとりで戦争ごっこか。ここにいる誰ひとりとして本当の戦争を知らない。俺はあの戦争を戦って帰ってきたのだ。俺は戦争の英雄なんだ。それなのに俺に対するこいつら

の口の利き方はなんだ。むらむらと怒りが湧いてきた。

「おまえらの知ったことか！」

ランボーは怒鳴って黙りこんだ。

漢直らは腹を立て、彼を法興寺ほうこうじへ引っ立てて行った。そこは推古天皇の御代に蘇我馬子が建造した寺で、広々とした境内には天を衝く五重の塔と壮麗な仏殿がならんでいる。かつてはベトナムへ向かう兵たちの壮行会もここで開かれたものだ。

金堂へランボーが連れていかれると、僧たちと語らっている二人の男があった。

ひとりには蘇我入鹿、もう一人は古人大兄皇子である。

「なんだよ、そいつ」と古入皇子は怯えて腰を浮かせた。「中大兄の刺客だったらどうするんだ。こんなところへ連れてくるな」

しかし蘇我入鹿は古入皇子の怯え方を鼻で嗤わらい、ランボーに向かって言った。

「おまえ、ひょっとしてベトナム帰りではないか？」

ランボーは何も言わず、ただ入鹿をギロギロと睨むばかりである。

やがて蘇我入鹿はランボーに興味を失ったように、古入皇子に話しかけた。

曰く、ベトナム戦争から戻って来た連中を見ると腹が立つ。あんな腑抜けどもでは戦争が長引くのも無理はない。つい昨年もベトナムコンドもの奇襲作戦にマンマとやられ



たらしいが、休戦期間だからといってノンビリしている方が悪いではないか。休戦期間にこそ先手を打って攻撃すべきだった。俺ならそうする。かつて我が祖父蘇我馬子はドミノ理論を唱え、共産主義の拡大から我が国を守るべく立ち上がった。俺はその志を継いでこの国を守りたい。いっそ自分でベトナムへ乗りこみたいぐらいだが、国政をないがしろにするわけにいかないからもどかしくてならぬ。

あまりの言いぐさにランボーは怒り心頭に発して入鹿に殴りかかったが、入鹿はまるで予想していたかのようにひらりと飛び退いた。野獣のようなランボーの剣幕に古人皇子は肝を潰し、瞬く間に本尊の蔭かげに逃げこんでしまった。ランボーはすぐに漢直たちにのしかかられ、金堂の床に押さえつけられた。犬のように唸ってみてもどうしようもなかった。

蘇我入鹿はせせら笑った。

「牢に入れておけ。あとでベトナムの土産話でも聞こう」

かくしてランボーは境内の隅に連れていかれた。

しかし彼は、竹で作られた牢を見てふたたび激しく抵抗した。

「やめろ、そんなところに入れるな」

そのとき、ランボーの脳裏に戦地の情景がゆらめいた。